季節の童謡・唱歌 秋のうた ： 〈虫のこえ〉を中心に

著者名(日)	斎藤 恵
雑誌名	大妻女子大学家政系研究紀要
巻	51
ページ	83-92
発行年	2015-03-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006009/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

季節の童謡・唱歌： 秋のうた
―＜虫のこえ＞を中心に ―

斎藤　恵
大妻女子大学家政学部児童学科

Children's Song In Autumn
― *The Singing Of Insects* ―

Megumi Saito

Key Words : 手作り楽器（Homemade Musical Instruments），音色（Timbre），練習（Practice），合奏（Ensemble），連携（Cooperation）

要旨

日本の「秋のうた」のひとつ＜虫のこえ＞（文部省唱歌：小学校音楽科歌唱共通教材）の音楽的・詩的特色を生かして考えた手作り楽器（リズム楽器・簡易旋律楽器）を中心にした合奏パターンと小学校音楽科学習指導計画、題材設定、評価基準等に関する考察。尚、幼稚園や保育施設で行なう場合は他領域、小学校で行なう場合は他教科（算数科、図画工作科、生活科、理科等）と連携して実践することが理想的である。

1．はじめに（動機・目的）

本稿を執筆する直接の動機となったものは、本稿の筆者が昨年秋に担当した『大妻女子大学オープンキャンパス（2013 年度）』の模擬授業「弾いてみよう、歌ってみよう！ 季節の童謡」である（注 1）。この模擬授業は 10 月に実施されたため、筆者は秋から冬にかけて歌われる童謡・唱歌として、＜どんぐりころころ＞＜まつぼっくり＞＜まっかな秋＞＜たきび＞の四曲を採り上げた。以上の童謡はこれまで大学の音楽の授業においても教材として用いているが、模擬授業で採り上げる際に、改めて童謡や唱歌と季節について考え、その成立等についても調べた。そこで幼児音楽における季節感の表現や、児童音楽における唱歌教材の教育上の意味について、さらに追究する必要性を感じたため、本稿の執筆に思い至った。本稿の端的な目的は童謡・唱歌としての「秋のうた」の中で、歴史も古いうえに、現在、小学校低学年の音楽科歌唱共通教材の一曲である＜虫のこえ＞（文部省唱歌）を採り上げ（注 2）、幼稚園や小学校における教材として、この曲の音楽的・詩的特徴を生かしながら、音楽の指導について考察することである（注 3）。

2．季節と音楽について

もし季節と音楽について語ろうとするなら、誰もが思い浮かべる作品として、バロック時代のイタリアの作曲家、A. ヴィヴァルディ（1678～1741）のヴァイオリン協奏曲集（全 12 曲）《和声と創意の試み》（1725 刊行）の第 1～4 番＜春・夏・秋・冬＞があげられるだろう（注 4）。つぎに思い浮かべる作品はウィーン・クラシックの作曲家、F.J. ハイドン（1732～1809）の四部から成るオラトリオ《四季：春・夏・秋・冬》（1799～1801）であろうか。これら二人の作曲家の二作品は 21 世紀の現代においても演奏される機会が多く、とくにヴィヴァルディの《四季》はテレビのコマーシャル等にも用いられており、一般に広く普及している（注 5）。また三大バレエによって名高い 19 世紀ロシアの P.I. チャイコフスキー（1840～93）は（注 6）、ピアノ作品《四季》（1875～76）を残している。このピアノ曲には「12 の性格的な描写」という副題が付けられており、四季とは言ってもたんに四つの曲ではなく、一年の 12 か月の様子を表した 12 の曲から出来ている（注 7）。これら 12 曲は児童でも弾けるように作られており、広大なロシアの季節や情景を想像しながら、こどもたちの想像力をかきたてる貴重な作品と言えるだろう（注 8）。そして日本の作曲家の作品としては、武満徹（1930～96）の打楽

器のための《四季》（1970）をあげることができる。さらに一般的な歌曲としては、荒木とよひさ（1943～）（作詞・作曲）の＜四季のうた＞（1970）や久石譲（1950～）の＜めぐる季節＞（1989）（作詞：吉本由美）等が知られている（注 9）。

日本の童謡について書かれた書籍や曲集を開いて目次を見ると、まず「四季：春・夏・秋・冬のうた」、つぎに「毎日のうた」や「行事のうた」、そして「アニメーション・ソング」や「人気のあるうた」等の項目順に並べられていることが多い（注 10）。明治 20 年に出版された日本で初めての『幼稚園唱歌集』（1887）（全 29 曲）は「緒言」の中で、幼稚園における唱歌遊戯の目的や効用等について述べられていたものの、歌詞が文語体で書かれていたため、幼児たちが親しみにくく批判が多かった。そこで明治 34 年に出版された『幼稚園唱歌』（1901）（全 20 曲）では、幼児が歌うためにふさわしいと考えられた唱歌が口語体で書かれ、しかも「四季の順」に並べられた（注 11）。新たに作られたこの『幼稚園唱歌』には＜雪やこんこん＞や＜お正月＞等、今日でもよく歌われる童謡も含まれており、この童謡集における「四季の順に並べる」という伝統が今日でも継承されていると思われる。『幼稚園唱歌集』（1887）は西欧の唱歌教材を基にして作られたものがほとんどであったが（注 12）、その後、「童謡運動」を経て、日本人が作詞・作曲した童謡が作られるようになった（注 13）。一方、小学校唱歌に関しては、『尋常小学唱歌』が 1914 年に音楽の最初の国定教科書として世に出され、そこに＜四季の雨＞（作詞作曲者不詳）が掲載されたが、この曲は第二次世界大戦終了（1945）後に小学校唱歌から外された（注 14）。尚、戦前の文部省唱歌では＜四季の月＞（1885）や＜いなかの四季＞（1910）等が含まれていた（注 15）。

3. 秋の音楽について

西欧のクラシック作品においては、上述したチャイコフスキーのピアノ曲《四季》より第 10 曲（10 月）＜秋の歌＞（ニ短調）、アメリカ生まれの W. ギロック（1917～93）が書いたピアノ曲《抒情小曲集》より＜秋のスケッチ＞（ロ短調）、W. ギロックの弟子であるグレンダ・オースティンの《ギロックとグレンダの魔法のピアノ》より＜秋の朝＞（イ短調）等が児童向きの秋の曲としても知られている（注 16）。この三つの曲は短調で書かれているとはいえ、とくに暗くはないが、いずれもしっとりとした雰囲気をもっている。

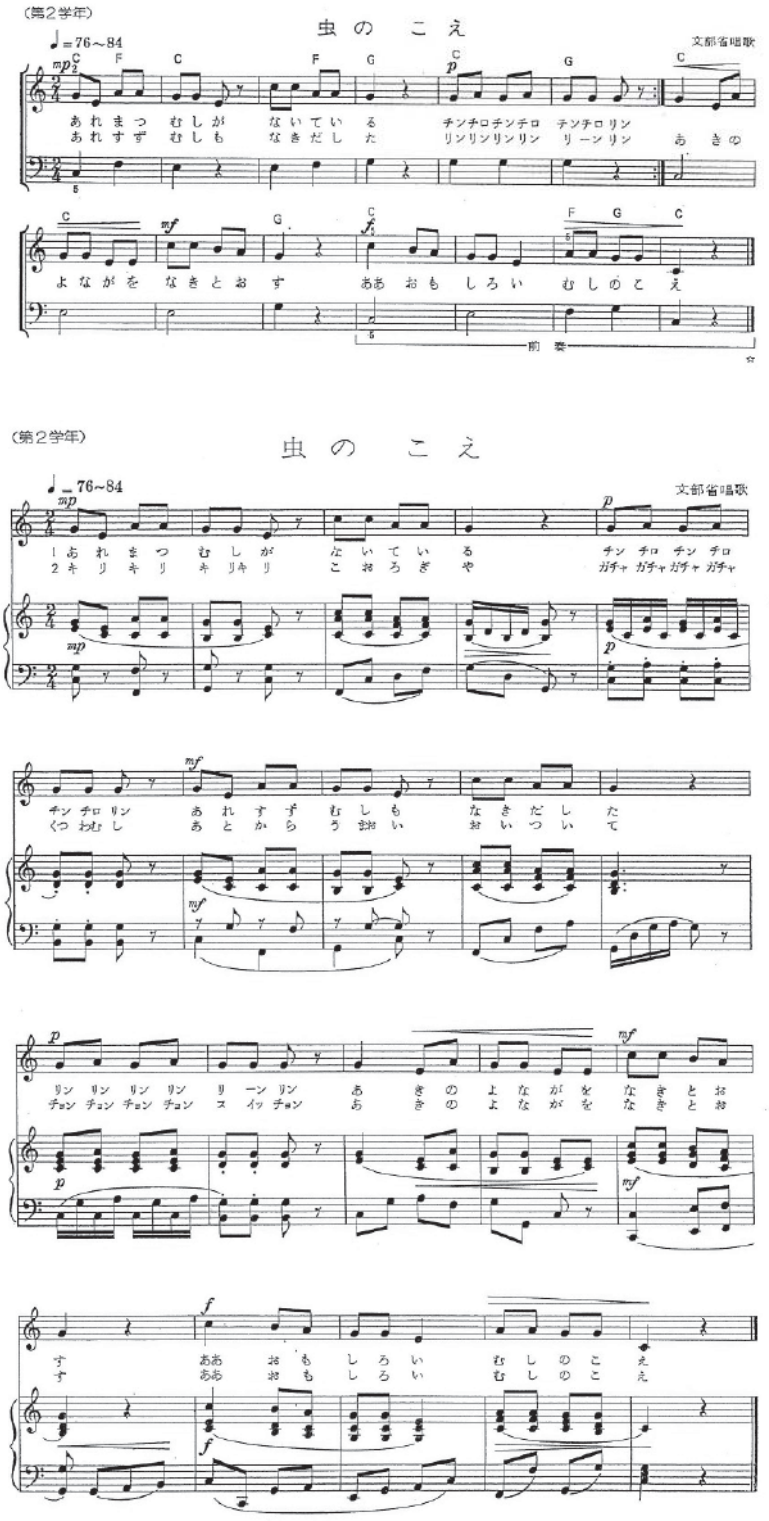
一方、欧米のポピュラー音楽において、秋の曲といえば＜枯葉＞＜ローマの秋＞＜ニューヨークの秋＞等が以前から知られているが、＜ニューヨークの秋＞以外の 2 曲は短調で書かれている。そのためか＜枯葉＞と＜ローマの秋＞の 2 曲にはどこか寂寥感が漂っている。日本抒情歌曲における代表的な「秋のうた」の中では、＜秋桜＞＜秋の砂山＞＜秋の月＞＜秋の野＞＜秋止符＞が短調、＜秋でもないのに＞＜秋の子＞＜秋の夜＞が長調で書かれている（注 17）。ここにあげた 8 曲中、5 曲は短調、3 曲が長調ということになる。大人の「秋のうた」では短調の曲の方がやや多いと言えるだろうか。

日本の秋の童謡の中で比較的親しまれている曲としては、先に述べた＜どんぐりころころ＞＜まっかな秋＞＜まつぼっくり＞＜たきび＞の他に＜こおろぎ＞＜里の秋＞＜小さい秋みつけた＞＜虫のこえ＞＜もみじ＞等があげられる。この中では＜小さい秋みつけた＞のみ短調である。現在、童謡は長調が主流であるが、短調のものも歌われていないことはない。前述の＜四季のうた＞や＜めぐる季節＞と同じく、＜赤い靴＞＜かあさんの歌＞＜雪の降る町を＞も短調で書かれているが、比較的よく歌われている曲である。

「秋」というと大人の世界では、落葉や枯葉、そして失恋や別離等、どちらかと言えば感傷的なイメージを伴うが、こどもたちの世界では必ずしもそうではない。幼児や児童の間では、秋には「運動会」や「学芸会」や「芋ほり」等、楽しい行事がいくつもある。とくに「食欲の秋・味覚の秋」と言われるように、秋には秋刀魚や栗や松茸など、海の幸から山の幸まで、美味しいものが勢揃いしている。そして＜もみじ＞にも歌われているように、色彩豊かな自然に接することが出来る。さらに秋には様々な虫の声が聞かれる。本稿の筆者も小学生の時に、キリギリスや鈴虫を縁日で買った思い出がある。またその当時、筆者が暮らしていた木造の家には、野生のコオロギやクツワムシも住んでいて、毎年秋になると、その見事な歌声を聞かせてくれた（注 18）。

4. 唱歌＜虫のこえ＞について

文部省唱歌の＜虫のこえ＞は『尋常小学校読本唱歌』（1910 年）に発表された。この時のタイトルは



譜例　<虫のこえ>「上段：簡易伴奏譜」「下段：普通伴奏譜」

＜蟲のこゑ＞となっていたが、第二次世界大戦終了（1945 年）後、＜虫のこえ＞に改められた。また第 2 番の歌詞にある「きりぎりす」が、『新訂尋常小学唱歌』（1932 年）において「こほろぎや」に改められ、現代では「こおろぎや」となっている（注 19）。現在、＜虫のこえ＞は小学校第 2 学年の歌唱共通教材になっており、たんに歌うだけではなく、合奏するのに適しているとして、小学校音楽科の指導書において、しばしば採り上げられている（注 20）。

小学校音楽科の指導書においては、＜虫のこえ＞を合奏するに当たって、通常、身近な楽器、たとえばウッドブロック、カスタネット、スズ、タンバリン、トライアングル、マラカス、鉄琴、木琴等があげられている（注 21）。本稿では既成の楽器ではなく、手作り楽器によって、唱歌＜虫のこえ＞を合奏することを考える。こどもたちには、まず 5 種類の虫（マツムシ、スズムシ、コオロギ、クツワムシ、ウマオイ）の本物の声を聞かせることが理想的であるが、それが難しければ、CD で 5 種類の虫の声を聞かせ、それぞれの虫の声がどのような楽器の音に近いかイメージしてもらう。ただ、実際のそれぞれの虫の声は繊細かつ微妙に異なっている（注 22）。そこでこどもたちの個人的な感性の違いによって、それぞれの虫の声が捉えられることが予想される（注 23）。

5. 題材設定と指導計画について

1） 題材設定

題材例：いろいろな楽器を作り、唱歌＜虫のこえ＞を合奏して、音色のちがいを楽しむ。

題材設定の趣旨：身近な素材から実際に楽器を作ることと、その楽器を用いて合奏することにより、試行錯誤しながら挑戦する力と新たな表現力を養う。

2） 指導計画

ここでは 45 分授業を 8 週かけて行なう計画をたてた（注 24）。

(1) 題材の説明：唱歌＜虫のこえ＞について（複数の観点から）。
- CD 鑑賞：唱歌の＜虫のこえ＞と昆虫の「虫の声」。
- 教員がピアノを弾いて全員で唱歌＜虫のこえ＞を歌う。

(2) 教材：手作り楽器の説明
- 楽器のいろいろ：絵や図、または映像を見せる。
- 材料集め（宿題にしてもよい）。
- グループ分け：楽器の作成と演奏の分担。

(3) 手作り楽器の作成①
- リズム楽器

(4) 手作り楽器の作成②
- 簡易旋律楽器

(5) 個別練習
- 歌唱
- 普通の旋律楽器：ピアノ（またはキーボード）、リコーダー、木琴、鉄琴。
- 手作りのリズム楽器
- 手作りの簡易旋律楽器

(6) グループ練習
- 同じ楽器を演奏する者が集まって練習する。

(7) 全体練習
- 異なる楽器も合わせて練習する。

(8) 発表会
- 単純な組み合わせのグループから、複雑な組み合わせのグループの順に発表する。

○手作り楽器の作成や個別練習に時間がかかった場合には配当時間は 8 週ではなく、10 週あるいはそれ以上かけて行なってもよい。小さい楽器は各自持ち帰らせ、自宅で練習させてもよい。

6. 手作り楽器について

ここでは手作り楽器の中でも、市販のキットを用いず、はじめから手作りのものに挑戦する。さらに身近な素材を用いて安価で仕上がるものをめざすため、廃物利用についても考える。尚、楽器の仕組みとして、振って音を出すもの（マラカス等）、叩いて音を出すもの（ドラム等）、擦って音を出すもの（ギロ等）、弦をはじいて音を出すもの（弦楽器等、ここでは輪ゴム楽器）、息を吹いて音を出すもの（笛等）等、いくつかのパターンがあることをあらかじめこどもたちに示すとよい（注 25）。唱歌＜虫のこえ＞には 5 種類の虫が登場するので、10 個の手作り楽器（リズム楽器 5、簡易旋律楽器 5）を作ることにする（注 26）。

1） 手作りのリズム楽器

(1) 手作りマラカス

材料「外側」空の蓋つきペットボトル、蓋つき空きビン、ビニールテープ。

「中身」木の実、貝殻、米、ビー玉、ビーズ、スパンコール、小石、砂、砂利等。

作り方：ペットボトルやビンに上記の木の実等を少々、入れて蓋をする。原則として、中身の材料は混ぜない。蓋がはずれないように、ビニールテープで固定する。ペットボトルやビンの外側に自家製のシールを貼ってもよい。

用い方：木の実等を入れたペットボトルやビンを軽く振る。

(2)　手作りカスタネット

材料：牛乳パック、ペットボトルの蓋、ビニールテープ。

作り方：牛乳パックを横6センチ、縦18センチ位に切り取り、半分の所で折る。パック内側の両端の中央に、ペットボトルの蓋を1個ずつビニールテープで貼って固定する。パックの切り取る幅を広くし、蓋を2個ずつにすると、より大きい音になる。パックの白い方を外側にして、絵を描いてもよい。

用い方：外側から片手に持って、蓋どうしを打ち鳴らす。

(3)　手作りドラム

材料：ポリバケツ、洗面器、丈夫な空き箱、割箸、ビニールテープ。

作り方：割箸を割らず、細い方の先にビニールテープをまき、バチを作る。バケツの取手は邪魔にならないように、ビニールテープで貼って固定させておく。空き箱の場合、蓋がはずれないようにビニールテープで貼り、蓋に絵を描いてもよい。バケツや洗面器に、自家製のシール等を貼ってもよい。

用い方：バケツや洗面器や箱をさかさにして、上面をバチまたは手でたたく。

(4)　手作りギロ

材料：ポリ容器と洗濯板（凹凸面のあるもの）、割箸、ビニールテープ。

作り方：割箸を割らず、細い方の先にビニールテープをまき、バチを作る。

用い方：ポリ容器や洗濯板の凹凸面をバチでこする。

(5)　手作りコンガ

材料：キッチンタオルの芯、クレラップの芯、トイレットペイパーの芯、端切れ、割箸、ビニールテープ、セロテープ。

作り方：割箸を割らず、細い方の先にビニールテープをまき、バチを作る。芯の両端に端切れを被せ、セロテープで取り付ける。芯の外側に絵を描き、自家製のシール等を貼ってもよい。

用い方：端切れを付けた片面をバチや手で軽くたたく。

○装飾に関しては、「秋」や「虫」を意識して、色彩豊かに製作してもよい。

マラカスの中身に関しては、演奏する時期が秋なら「木の実」が適当であるし、もし夏場なら「貝殻」や「砂」等が季節感を感じられて良いだろう。

2)　手作りの簡易旋律楽器

(1)　手作り笛

材料：大きさのほぼ同じ空きビン8個、水、水差し。

作り方：自分の前に左から右へビンを8個並べ、水差しに入れた水の量を少しずつ増やしながら水を入れてゆく。その際、音を聴きながら水の量を調節し、ビン8個から成る「ドレミファソラシド」の音階を作ることを目標にする。今回設定した＜虫のこえ＞の合奏では、「ソとラ」の音が重要なので、「ソとラ」のビンの音を重点的に調節する。

用い方：自分の口をビンの口に近づけて吹く。

(2)　手作り輪ゴム楽器

材料：空のジュースパック、輪ゴム8本、はさみ、セロテープ。

作り方：ジュースパックの口を開き、上半分の四角にはさみを入れる。その時、二か所は深く、残りの二か所は浅くはさみを入れ、内側に折り曲げ、セロテープで貼る。次にはさみで8か所に切り込みを入れ、そこに輪ゴムを8本取り付ける。輪ゴムを引いたり緩めたりして、ドレミファソラシドに調節し、底をセロテープで貼って固定する。長い方の外側の面を、パックの白い方にして、そこに絵を描いてもよい。

用い方：輪ゴムをはじいて音を出す。

(3)　手作りバーカッション①

材料：大きさのほぼ同じ空きビン8個、水、水

差し、割箸、ビニールテープ。

作り方：割箸を割らずに、細い方の先にビニールテープをまき、バチを作る。自分の前に左から右へビンを8個並べ、水差しに入れた水の量を少しずつ増やしながら水を入れてゆく。その際、音を聴きながら水の量を調節し、ビン8個から成る「ドレミファソラシド」の音階を作ることを目標にする。今回設定した＜虫のこえ＞の合奏には、「ソとラ」の音が必要なので、「ソとラ」のビンの音を重点的に調節する。

用い方：並べたビンをバチでたたく。

(4)　手作りパーカッション②

材料：大きさのほぼ同じ空きカン8個、割箸、ビニールテープ。

作り方：割箸を割らずに、細い方の先にビニールテープをまき、バチを作る。自分の前に左から右へカンを8個並べ、水差しに入れた水の量を少しずつ増やしながら水を入れてゆく。その際、音を聴きながら、水の量を調節し、カン8個から成る「ドレミファソラシド」の音階を作ることを目標にする。今回設定した＜虫のこえ＞の合奏には、「ソとラ」の音が必要なので、「ソとラ」のカンの音を重点的に調節する。

用い方：並べたカンをバチでたたく。

(5)　手作りパーカッション③

材料：大きさのほぼ同じ口の広い頑丈なコップ8個、割箸、ビニールテープ。

作り方：割箸を割らずに、細い方の先にビニールテープをまき、バチを作る。自分の前に左から右へコップを8個並べ、水差しに入れた水の量を少しずつ増やしながら水を入れてゆく。その際、音を聴きながら水の量を調節し、コップ8個から成る「ドレミファソラシド」の音階を作ることを目標にする。今回設定した＜虫のこえ＞の合奏では、「ソとラ」の音が重要なので、「ソとラ」のコップの音を重点的に調節する。

用い方：並べたコップをバチでたたく。

○同じ大きさのビン、カン、コップに水を入れて、水の量の差によって、音の高低が出来ることを理解する。水を入れないビン、カン、コップでも、その大きさの差によって、たたくと音の高低が生じることを認識する。

○パーカッションの①～③については、ビン、カン、コップという材質による音色の違いを意識させる。

○厳密に言えば、ドレミファソラシド（音階）を普通の旋律楽器に合わせなくてもよいが、今回は合奏することを想定しているので、＜虫のこえ＞の楽譜の第5～6、11～12小節の「ソとラ」の音はピアノ等の「ソとラ」（実音）の音に合わせて作るとよい。

○ここにあげた材料は基本的なものである。これ以外にも身近な素材を用いて、様々な楽器を工夫して作ることを試みてほしい。

7.　合奏パターンについて

以下、例として、5種類の合奏パターンをあげる（注27）。

1）　第1番：第1～4、7～10、13小節以下は歌い、第5～6、11～12小節を歌と手作りリズム楽器で演奏する。第2番：第1～2小節は歌と手作りリズム楽器で演奏する。第3～4、7～10、13小節以下は歌い、第5～6、11～12小節を歌と手作りリズム楽器で演奏する。

2）　第1番：第1～4、7～10、13小節以下は歌い、第5～6、11～12小節を手作り旋律楽器で演奏する。第2番：第1～2小節は歌と手作りリズム楽器で演奏する。第3～4、7～10、13小節以下は歌い、第5～6、11～12小節を手作り旋律楽器で演奏する。

3）　第1番：第1～4、7～10、13小節以下は普通の旋律楽器で演奏し、第5～6、11～12小節を普通の旋律楽器と手作りリズム楽器で演奏する。第2番：第1～2小節は普通の旋律楽器と手作りリズム楽器で演奏する。第3～4、7～10、13小節以下は普通の旋律楽器、第5～6、11～12小節を普通の旋律楽器と手作りリズム楽器で演奏する。

4）　第1番：第1～4、7～10、13小節以下は普通の旋律楽器、第5～6、11～12小節を手作り旋律楽器で演奏する。第2番：第1～2小節は普通の旋律楽器と手作りリズム楽器で演奏する。第3～4、7～10、13小節以下は普通の旋律楽器、第5～6、11～12小節を手作り旋律楽器で演奏する。

5）　第1番：第1～4、7～10、13小節以下は普

通の旋律楽器、第5〜6、11〜12小節を手作り楽器（リズム・旋律）で演奏する。第2番：第1〜2小節は普通の旋律楽器と手作りリズム楽器で演奏する。第3〜4、7〜10、13小節以下は普通の旋律楽器、第5〜6、11〜12小節を手作り楽器（旋律・リズム）で演奏する。

○第1パターンから第5パターンまで、単純な組み合わせから、複雑な組み合わせになる。第1・2パターンは小学校低学年のみならず幼稚園や保育所等で用いてもよいし、第3〜4パターンは小学校中学年、第5〜6パターンは小学校高学年が用いてもよい。

○普通の旋律楽器とは、ピアノ（またはキーボード）、リコーダー、鉄琴、木琴等を指す。ここでは手作りの旋律楽器の補助的な役割として用いることを前提とするため、音量は控え目にする。第2から第5パターンまで、各パターンにおいて、普通の旋律楽器を取り替えてもよいし、＜虫のこえ＞の第1番と第2番において、別の楽器を用いてもよい。

○ピアノではなくキーボードを用いる場合、実際の「虫の声」に近い音色や、「虫の声」に合う音色をセットしてもよい。また上記の普通の旋律楽器以外の適当な旋律楽器が使用可能であれば、それを用いてもよいが、いずれにせよ全体的な音のバランスに配慮する。

8. 評価基準について

一般的な評価基準としては、こどもたちの音楽に対する関心や意欲、表現の技能等がまずあげられているが、ここでは上記の項目に根気や持続性、発展性等も加える（注28）。

① 音楽と題材に興味・関心をもっているか
② 楽器を作ることに対して根気があるか
③ 楽器それぞれの音色に耳を傾けているか
④ コンスタントに練習するという持続性がみられるか
⑤ 他の児童と協力する姿勢があるか
⑥ 週ごとに発展性が見られるか
⑦ 合奏することを楽しいと感じているか
⑧ 今回採り上げない曲や楽器について教師に質問があるか

9. 考察

1) 音楽と他教科または他領域との連携について

(1) 算数科：音楽のリズムや拍子は数と関係が深いということを理解する。

(2) 図画工作科：手作り楽器を作る際の装飾について何がふさわしいか考える。

秋という季節感を表現するための色彩や配色を工夫する。

(3) 生活科：校庭や近くの公園等に行き、手作り楽器の製作に使用する木の実や小石等を採集する。生活用品の中から楽器作りの素材を発見する。不用品の中から利用出来るものを探索する。

(4) 理科：唱歌＜虫のこえ＞に登場する5種類の虫の形態や分布等を調べ、校庭や近くの公園等に行って実際に虫の声を聞き、その生態を観察する。ビン等に水を入れて叩くと水の量によって、音の高低が生じることを理解する。水を多く入れるほど、音が高くなるということを認識させ、さらに試行錯誤によって音階を作ることを学ばせる。

2) 指導上の目標について

本研究では、こどもたちに技巧的に楽器を作らせ、その楽器を用いて上手に合奏させるということを必ずしも目標にはしていない。

① 自分たちでも実際にいろいろなオリジナル楽器を作れて、さらにその楽器によって、様々な音の高低や音色を出せるということを自覚させることを第一の目標にする。

② 身近な不用品を再利用することの可能性と、自ら作った楽器で演奏・合奏するという達成感を体得させることを第二の目標とする。

③ 秋という季節感を味わってもらうことと、手作り楽器による音色の多様性を理解させることを第三の目標とする。

④ 音楽を通してのこどもたちとの様々な場面において教師の支援や働きかけの在り方を再確認することと、手作り楽器のみの合奏に至ることが最終的な目標となる。

10. おわりに（結論・展望）

本稿では唱歌＜虫のこえ＞を手作り楽器で演奏することを考えたが、実に様々な合奏パターンがあることが分かった。どのパターンがもっとも演奏しやすいかということは、その場の状況や人数、環境等の条件にも左右されると思われるが、何よりも教師

の気配りや声掛け等によって、こどもたちの活動が促進することが予測できる。そしてこどもたちが他の「虫の歌」や「季節の歌」をはじめ、各国の民族楽器に対する興味を抱くことも期待される。さらに同じ手作り楽器を用いて、もっと複雑な組み合わせで合奏してみようという意欲、同じ手作り楽器を用いて異なる曲を演奏してみようという探求心、より高度で複雑な楽器を作ろうという追求心等を児童たちに持たせることが出来れば、この試みはある程度成功したと言えるだろう。今回は「秋のうた」の中から＜虫のこえ＞を採り上げたが、つぎに他の「虫の歌」を応用することや、他の季節を代表する童謡や唱歌を採り上げて、このテーマ（季節の童謡・唱歌）をさらに掘り下げることを今後の課題としたい（注29）。

付記：その他の虫のうた

＜あおむしのうた＞＜あかとんぼ＞＜ありさんのおはなし＞＜おしりかじりむしのうた＞＜おつかいありさん＞＜かたつむり＞＜こおろぎ＞＜こおろぎの友＞＜こがねむし＞＜せみがなきました＞＜せみのうた＞＜ちょうちょう＞＜てんとうむしのうた＞＜てんとう虫のサンバ＞＜とんぼのめがね＞＜とんぼの目玉＞＜便所虫＞＜ほたる＞＜ほたるこい＞＜虫の楽隊＞＜もんしろちょう＞＜ラ・クカラチャ＞等（注30）。

注

1) 2013年10月6日（日）実施.
2) 堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』ワイド版岩波文庫54，岩波書店，1991年，149頁．古曲＜虫づくし＞（箏曲）は唱歌＜虫のこえ＞の歌詞と関連が深い。有本真紀編『小学校音楽科教育法』教育芸術社，2011年，31頁.
3) 現在，本稿の筆者は実際に授業において＜虫のこえ＞を教材として採り上げている.
4) 第1～4曲＜春・夏・秋・冬＞をまとめて《四季》と呼ばれるようになった．尚，第1～4曲のスコアにはそれぞれの季節に即したソネットが添えられている.
5) ＜冬＞第1楽章はダイハツ「新ムーヴ」のコマーシャルで用いられている.
6) 三大バレエ：白鳥の湖，眠れる森の美女，くるみ割り人形.
7) 各12曲には1月から12月まで，その月に相応しいタイトル（第1曲＜炉端にて＞，第2曲＜謝肉祭＞，第3曲＜ヒバリの歌＞，第4曲＜松雪草＞，第5曲＜5月の夜＞，第6曲＜舟歌＞，第7曲＜刈り入れ人の歌＞，第8曲＜収穫＞，第9曲＜狩＞，第10曲＜秋の歌＞，第11曲＜トロイカ＞，第12曲＜クリスマス＞）が付けられ，1曲ごとに詩も添えられている.
8) 同じく19世紀生まれのロシアの作曲家，A.K.グラズノフ（1865～1937）のバレエ音楽に《四季》（1899）がある.
9) ＜めぐる季節＞の歌詞には「春・夏・秋・冬」が登場する.
10) 書籍や曲集によっては同じ童謡が異なる季節や行事に分類されていることもある.
渋谷清視著『童謡さんぽ道（上・下）』，鳩の森書房，1979・1980年.
清水麻美編『決定版．こどもの四季スペシャル』デプロ，2004年.
鈴木恵津子・富田英也編『改訂：ポケットいっぱいのうた』教育芸術社，2011年.
坂東貴余子編『こどもの歌ベストテン．改訂版』ドレミ，2001年.
南曜子編『心を育む子どもの歌』教育芸術社，2005年.
本廣明美・加藤照恵編『幼稚園・保育園のうた．ピアノ伴奏曲集』ドレミ，2010年.
読売新聞文化部著『唱歌・童謡ものがたり』岩波書店．1999年.
11) 三森桂子・小畠エマ編『音楽表現』一藝社，2014年，36～37頁.
12) 三森桂子・小畠エマ編『音楽表現』一藝社，2014年，36頁.
13) 三森桂子・小畠エマ編『音楽表現』一藝社，2014年，38頁.
14) 上笙一郎編『日本童謡事典』東京堂出版，2005年，183頁.
15) 上笙一郎編『日本童謡事典』東京堂出版，2005年，183頁.
16) 邦人作品では，武満徹の＜秋庭歌＞＜秋の歌＞＜November Steps＞が有名である.
17) 長田暁二編『日本抒情歌全集3・4』ドレミ楽譜出版社，1997，2008年.
18) 周知の通り，「虫の声」とは虫の鳴き声ではなく，虫が翅をこすって出す音である.
19) 堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』ワイド版岩波文庫54，岩波書店，1991年，149，258頁.
20) 今川恭子監『おんがくのしくみ』教育芸術社，2008年，107～108頁.
重嶋博編『小学校音楽科指導法』教育芸術社，2000年，45頁.
21) 重嶋博編『小学校音楽科指導法』教育芸術社，2000年，46頁.
22) CD『効果音全集②：動物・鳥・虫・蛙』

COLUMBIA（COCE32866）.

23） 唱歌＜虫のこえ＞に登場する虫たちは，雄が雌を呼ぶために翅を擦って音を出すという．市川顕彦編『バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑』日本直翅類学会，北海道大学出版会，2006年，452～474頁.

24） （1）は第1次（45分）を示す．以下，同様.

25） 石井玲子編『実践しながら学ぶ子どもの音楽表現』保育出版社，2009年，96～100頁.

26） 黒岩貞子編『手づくり楽器』ドレミ楽譜出版社，1990年，20，30，70頁.

27） ＜虫のこえ＞譜例参照（上段：簡易伴奏譜，下段：普通伴奏譜）.
簡易伴奏譜は1番のみ掲載．本稿ではハ長調の普通伴奏譜を用いる.
重嶋博編『小学校音楽科指導法』教育芸術社，2000年，91，67頁（引用）.
＜虫のこえ＞（普通伴奏譜）はニ長調で書かれている楽譜もある.
熱田庫康編『教科教育法．音楽編』教育芸術社，2000年，86頁.

28） 熱田庫康編『教科教育法：音楽編』教育芸術社，2000年，58～61頁.

29） 本稿は大妻女子大学児童学科研究調査（2009～2013年度）の成果の一つである.

30） 外国民謡＜ラ・クカラチャ＞La Cuarachaはスペイン語で，ゴキブリを意味する.

引用・参考文献

○図書

・熱田庫康編『教科教育法：音楽編』大学音楽教育研究グループ，教育芸術社，2000年.
・有本真紀・阪井恵・山下薫子編『教員養成課程：小学校音楽科教育法．改訂版』教育芸術社，2011年.
・石井玲子編『実践しながら学ぶ子どもの音楽表現』保育出版社，2009年.
・伊藤嘉子編『手づくりゲームと音楽遊び』エー・ティー・エヌ，1988年.
・市川顕彦編『バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑』日本直翅類学会，北海道大学出版会，2006年.
・井上和男編『クラシック音楽作品名辞典．改訂版』三省堂，1996年.
・今川恭子監『おんがくのしくみ』教育芸術社，2008年.
・ヴィルマン＋ブランショ著『虫の肖像．世界昆虫大図鑑』奥本大三郎訳，東洋書林，2008年.
・長田暁二著『日本の愛唱歌』ヤマハミュージックメディア，2006年.
・上笙一郎編『日本童謡事典』東京堂出版，2005年.
・厚生労働省告示『保育所保育指針』フレーベル館，2008年.
・黒岩貞子編『手づくり楽器』ドレミ楽譜出版社，1990年.
・小島美子著『日本童謡音楽史』第一書房，2004年.
・小林公成編『世界文化生物大図鑑（改訂新版）：昆虫I』世界文化社，2004年.
・阪田寛夫著『童謡でてこい』河出書房新社，1986年.
・佐野靖著『心に響く童謡・唱歌．世代をつなぐメッセージ』東洋館出版社，2000年.
・澤崎眞彦編『新：音楽の授業づくり』音楽の授業づくり研究会，教育芸術社，2009年.
・重嶋博編『小学校音楽科指導法』教育芸術社，2000年.
・渋谷清視著『童謡さんぽ道（上・下）』鳩の森書房，1979・1980年.
・関根秀樹著『民族楽器をつくる』創話出版，1993年.
・多田信作・松岡義和筆『手づくりのおもちゃをつくろう』黎明書房，1975年.
・畑中圭一著『日本の童謡．誕生から九〇年の歩み』平凡社，2007年.
・堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』ワイド版岩波文庫54，岩波書店，1991年.
・毎日新聞学芸部著『歌をたずねて．愛唱歌のふるさと』（選書）音楽之友社，1983年.
・毎日新聞学芸部著『歌謡・いま・昔』（選書）音楽之友社，1985年.
・三森桂子・小畠エマ編『音楽表現』一藝社，2014年.
・文部科学省告示『小学校学習指導要領』東京書籍，2008年.
・文部科学省告示『幼稚園教育要領』フレーベル館，2008年.
・湯山昭著『新しい音楽2』東京書籍，2010年.
・横山太郎著『童謡大学．童謡へのお誘い』自由現代社，2001年.
・読売新聞文化部著『唱歌・童謡ものがたり』岩波書店，1999年.
・和辻哲郎著『風土．人間学的考察』岩波書店，1935年.

○楽譜

・ヴィヴァルディ『ヴァイオリン協奏曲．四季』音楽之友社，1986年.
・長田暁二編『日本抒情歌全集3・4』ドレミ楽譜出版社，1997，2008年.
・ギロック『こどものためのアルバム』全音楽譜出版社，1973年.
・ギロック『抒情小曲集．改訂版』全音楽譜出版社，1991年.

・ギロック＆グレンダ『魔法のピアノ．7 つの白い鍵盤から』全音楽譜出版社，2003 年.
・草野昌一編『スクリーン・テーマ・ピアノ・ソロ』シンコー・ミュージック，1974 年.
・古森優編『こどものうた大集合 210 曲』リットーミュージック，2012 年.
・清水麻美編『決定版．こどもの四季スペシャル』デプロ，2004 年.
・鈴木恵津子・富田英也編『改訂：ポケットいっぱいのうた』教育芸術社，2011 年.
・滝田千絵編『たのしいこどものうた 600 選』自由現代社，2011 年.
・チャイコフスキー『四季』音楽之友社.
・はじひろし編『ジャズ・ピアノ・プロムナード 1・2』ドレミ楽譜出版社，2007 年.
・坂東貴余子編『こどもの歌ベストテン．改訂版』ドレミ楽譜出版社，2001 年.
・南曜子編『心を育む子どもの歌』教育芸術社，2005 年.
・加藤照恵・本廣明美編『幼稚園・保育園のうた．ピアノ伴奏曲集』ドレミ楽譜出版社，2010 年.

○ CD
・『うたいつがれる童謡 100』COLUMBIA（COCX35864～67）.
・『効果音全集②：動物・鳥・虫・蛙』COLUMBIA（COCE32866）.